



一般社団法人 ၂၀၁၆- မြန်မာ့အလင်းစာတိုက်

日本ミャンマー友好協会報

第160号

平成29年7月発行

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 E-mail ● tzkosm@abelia.ocn.ne.jp http://jmfa-main.com/

● 本部 〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-20-1 住友不動産西新宿ビル15階 TEL.03-3371-5060 FAX.046-224-3011

発行人：米村紀幸
編集人：松尾義久



収録内容

新投資法成立、日本の協力を骨太に! ……	2	より楽しく充実したイベントに! 次回のミャンマー祭りについて……………	13
平成29年度役員名簿 ……	3	支部だより ……	13~15
ホームページ開設に当たって ……	3	表紙に寄せて ……	14
レド公路、援蔭ルートを行く① ……	4~6	会費納入のお願い ……	15
知ってますか! パゴダは寺院ではない① ……	7	協賛企業……………	16
緬国(ミャンマー)滞在奮戦記① ……	8~11	編集後記「ヤダナー」……………	16
新刊書紹介……………	12		



日本・ミャンマー両国経済関係の更なる発展に向けて

ミャンマー経済・投資センターは当協会の
附属機関になりました

写真：ヤンゴンにあるシュエダゴン・パゴダの祈願堂（撮影／岡晃市）

当協会はミャンマー関係で唯一の外務省認可一般社団法人です。



巻頭言 新投資法成立、日本の協力を骨太に!



一般社団法人 日本ミャンマー友好協会

会長 米村 紀幸

日本ミャンマー友好協会の活動が、皆様の協力を得て、少しずつ動き出してきたことを感ずる1年であった。ミャンマー祭りを核として、ミャンマー映画の上映、ブースの開設を通じ多くの人と交流の機会をもつとともに、ミャンマー紹介に貢献してきた。これを可能にしている協賛企業、個人の皆様へあらためて感謝申し上げたい。

今、ミャンマー関連で大きな関心もたれているのは、新投資法である。法律事務所、銀行などが主催する説明が頻繁に開催されいつも大変な盛況である。私も、5月31日に開催されたミャンマー投資委員会(MIC)、JICA共催の「ミャンマー投資セミナー」に出席した。ミャンマーからトウ・アウン・ミンMIC委員兼商業省次官、アウン・ナイン・ウー投資企業管理局(DICA)局長など要人がスピーカーとして参加し、日本側からは、法律事務所弁護士、JICAアドバイザーなどが参加した。聴衆は、約300人と盛況であった。目玉は新投資法の説明である。

新投資法は、昨年10月18日に

投資ルールを包括的に定めたものとして成立した。建前は、内外無差別である。本年4月までに施行規則、MIC告示が制定され全貌が見えてきたところである。投資家にとっては、投資規制業種、投資優遇業種、ゾーン制による優遇措置などが明示され、目途が立ちやすくなったと言えよう。ただ、貿易面、小売りなど最終局面で規制緩和が後退したと言われる。重要なポイントは、「外資」の定義を定める会社法の改正がまだおこなわれていない。外資の割合が35%未満の会社は、内資とされると伝えられているが、そうなれば、投資家にとり大きな選択肢が与えられることになる。

日系企業のミャンマー進出は、一服感がある。ミャンマー日本商工会議所の会員数は、2017年4月で346社であった。前年より、2社減少である。2011年の民主化以後53社から348社まで急速に増加したが、足踏みしている。2016年は、新投資法制定の動きがあり、様子を見るということ、また、アウンサンスーチー政権成立後、投資委員会が3月開催されなかったということも影響していよう。ちなみに、2016年度の直接外

国投資は、66.5億ドルで、前年の94.8億ドルから大幅に減少した。

ミャンマーの当面の課題は、内政の安定と経済成長である。少数民族との和平問題に関しては、第2回パンロン会議が去る5月に開催されたが、見通しがついた状態ではない。「連邦制」が議論されたようである。また、少数民族の武装解除問題は先送りされた。

一方、昨年後半から、アウンサンスーチー国家顧問自身、経済の停滞を認める発言をするようになった。経済政策が見えないということも、新規外国投資を妨げている要因であろう。昨年9月包括的な経済政策宣言が出されたが、具体策が見えてこない。政策立案能力が問われているところである。この面での日本の協力のチャンスでもあり、ネピドーの各省に政策担当経験者を大量に送り、日本の協力を骨太にする必要がある。産業政策、中小企業施策、各種の技術基準、工業規格など日本の知見と経験を伝えていくことが重要である。ソフトな投資環境整備の協力である。



一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 平成29年度役員名簿

会 長	米村 紀幸	理 事	渡邊 奉勝	監 事	古川 健士
副 会 長	高松 重信	理 事	イーイーミン	名誉顧問	千野 皓司
副 会 長	高橋 秀夫	理 事	イイキン	顧 問	田島 高志
専 務 理 事	都築 治	理 事	キンチー	顧 問	山口 洋一
常務理事(事務局長)	三宅 紘一	理 事	伊藤秀以智	顧 問	津守 滋
常 務 理 事	山下 賢一	理 事	水戸部麻里	相 談 役	安城 欽寿
常 務 理 事	新美 鉄雄	理 事	角谷 猛志	相 談 役	池田 正隆
理 事	山田 長満	理 事	浅野 静二	相 談 役	宮井 二郎
理 事	田中 進	理 事	湯ノ口俊市郎	参 与	布施 正廣
理 事	松尾 義久	監 事	藤村 建夫		
理 事	丸山 憲治	監 事	柴崎 等		

支部：関西、関東、愛知、四国、ヤンゴン、三重

ホームページ開設に当たって <http://jmfa-main.com/>

専務理事 都築 治



長い間待ち焦がれていた協会ホームページが開設しました。ホームページは斬新な内容になっていますが、いかがでしょうか。

当協会は1970年設立以来、ミャンマー(当時ビルマ)との友好親善に心血を注いで参りました。その歴史のほとんどは外務省所轄の社団法人としての活動でしたが、法の改正により、2012年「一般社団法人日本ミャンマー友

好協会」として再出発いたしました。当協会が外務省のご指導の下、外務大臣あてに旧団体「社団法人日本ミャンマー友好協会」解散の手続きを行いました。外務省の監理こそなくなりましたが、当協会は外務省から認知されている唯一のミャンマー関連団体です。

2015年、当協会は組織を大幅に変更し、従来関西にあった本部機能を東京に移しました。名義上の本部所在地は関西のままですが、これにより諸活動が機動的になり、各機関・団体との交流が以前にも増して活発になりまし

た。また協会本来の活動も、2015年秋東京・芝増上寺での緬日合作映画「にっぽんむすめ」上映、2016年春「ミャンマー鉄道の旅」開催、民間伝承「ナツ大祭」共催など、活性化しています。今後とも、粛々と日本とミャンマーとの友好親善活動を続けて参ります。

ミャンマーはますます魅力的な国になろうとしています。当協会に入会され、ミャンマーとの友好親善活動に参加なさいませんか。会員一同、仲間が増えることを心から楽しみにお待ちしております。

一般社団法人日本ミャンマー友好協会

東京都新宿区西新宿 7-20-1 住友不動産西新宿ビル15階 Tel: 03-3371-5060 <http://jmfa-main.com/>

*連絡先: 専務理事 都築 治 TEL080-9080-6001 E-mail tzkosm@abelia.ocn.ne.jp

*振込先: 三菱東京UFJ銀行 新宿新都心支店 普 0376654 日本ミャンマー友好協会 都築 治

*ご注意 当協会は南品川、名古屋にある全く同名の団体とは別組織で、人的な交流等はありません。

入会申込書

(一社) 日本ミャンマー友好協会の活動の趣旨に賛同し、下記の通り入会を申込いたします。

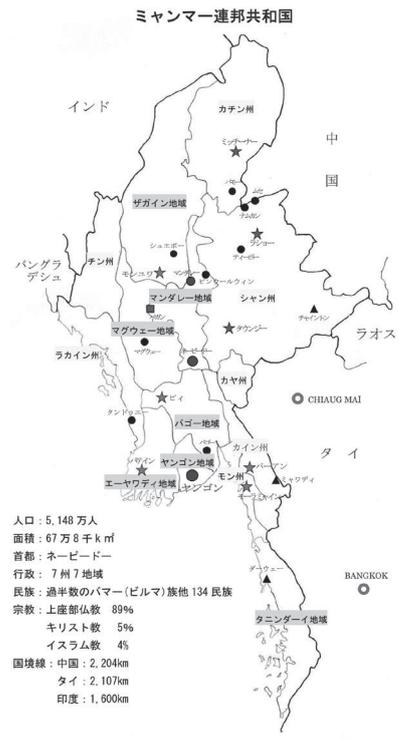
ご氏名	フリガナ	住 所	〒
ご職業			
ご連絡先	TEL:	FAX:	
	E-mail:		
年会費	学生3,000円、一般10,000円、法人50,000円		



ドキュメント・ミャンマーありのまま
レド公路、援蔣ルートを行く①
 —中国の影響を探る—

(一社)日本ミャンマー友好協会専務理事
 ミャンマー経済・投資センター理事
 中小企業診断士 都築 治

当会の都築治専務理事によるミャンマー探訪記である。東北部のカチン州、シャン州を中心にミッチーナ、バモ、ナムカン、ムセ、ラショ、ティーボー、ピンワールウィン、マンダレーと精力的に踏破。会員である浅野静二氏が同行した。都築専務はこのコースをたどるのは二度目になる。



1. ミッチーナ



3月20日(日)、ミッチーナにはエアバガンの双発機でマンダレーを8時35分の便で発ち、9時40分に着いた。迎いの自動車がやって来るまで、飛行場のすぐ前の店でしばし休息する。自動車到着後、直ちにエーヤワディ川の源流ミッソンに向かった。

ミッチーナはカチン州の州都



であるが、中国側からの主要交易路と少し離れているためか、予想していた程には中国発展の影響を受けていないように感じられた。シャン州の州都のタウンジーやラショと比べると、経済発展から取り残されたかのように静かなたたずまいを見せていた。しかし、オートバイと自動車の普及は目覚ましかった。また、以前訪れた時と比べると、十字架が掲げられた民家が減少して来ているように感じられた。カチン州ではキリスト教徒が最大の勢力で、ことさらクロスを強調する必然性が少なくなった所為かも知れない。さらに、街の中のいたる所で、翡翠で金持ちになったと思われる豪邸が見られるようになった。

ミッソンに行く道路は途中まで整備されており快適であるが、左折して山道に入ると悪路になる。ミッソンはミッチーナからは北方40数kmの所にあり、マリカ川とメイカ川が当地ミッソンで合流して大河エーヤワディ川になる。ミッソンに着いて驚いたことは、聖なるエ

ーヤワディ川の源流が無残な姿に変貌していたことである。

カチン州では砂金が採れ、多くの人が砂金採りに従事していることは聞いていた。その一つがミッソンである。砂金採りのためにミニ集落が形成され、川岸は土が取り除かれて石ころだらけになっていた。そして、合流点の対岸後方には中国がダムを建設しているのが見られた。このダムが環境破壊で大問題になり、その後工事が中断することとなった。

ミッソンを訪れた後は、市内にあるスタウンピイ・パヤーとアンドーシン・パヤーに行った。前者は日本人の寄付で建立された寝釈迦像で、バゴーやヤンゴンの像よりもかなり小振りであるが、優しい顔立ちをしている。ミッチーナはかつての激戦地で、水上源蔵少将が自決した地としても知られている。アンドーシンには釈迦の奥歯のレリックが安置されている。

ミッチーナはクリスチャンが多数派であるが、仏教徒も少なからず居住している。私はパヤーと寺

院・僧院は全く別の範疇のものであると記したことがあるが、アンダーシンではパヤーと僧院が同一の敷地内にあり、日本のお寺の様相を呈していた。

二つのパヤー参拝後は、カチン州立博物館に行った。20日は日曜日で休館であったが、当地の旅行社が手配してくれて見物することができた。カチン州に居住する民族グループの民芸品や、祭事用の品などが展示されていた。特に私が注目したのは、各言語のアルファベット表である。カチン州では数多くの少数民族が暮らしているのである。

ホテルに行く途中にカテドラル(大聖堂)があり、ミャンマー語で書かれた新訳聖書を購入した。3500k、携行用ブックケース1000kである。同行した浅野君は、上智大学の大学院出身でキリスト教に関して強い興味を持っており、ミャンマー語で書かれた沢山のキリスト教関連の書物や物品を購入した。

ミッチーナーの中心市街地をしばし散策し、中心街の一角にあるパンスン・ホテルに到着した。同ホテルは4階建てで近代的な外観

をしているが、バスタブはなくシャワーのみである。

しばらく休んだのち夕食に行こうとしたが、ホテルの近くにあるYMCAで日本語を教えている女性に廊下で出会う。彼女は愛知教育大学の出身で、同大学は刈谷市にある。私は刈谷の生まれであるから、しばし話がはずむ。彼女の話で、東京外語大修士課程の大西さんがカチン語の研究でYMCAに滞在していると言う。彼を呼んで来ると言うので1時間ほど待ったが、なかなかやって来ない。しびれを切らしてレストランに向かう。行ったのはジンボートウ・レストランと言う名のカチン料理店であった。同レストランでカウインエーを飲む。カウインエーはカチンやチンの地酒で濁り酒である。1杯800kであった。甘い酒であるがアルコール分が強く、酔っぱらってしまった。ホテルに戻っても元気が出ず、そのまま寝て仕舞う。

翌21日(月)の朝、ホテルの周辺をタウン・ウォッチングする。私は地理学科の出身で、落第させられて5年間の大学生活を送り、また、商業担当の中小企業診断士の経験が少なからずあり、街を

見て回るのが習性になっている。散策後、ホテルに戻りカバンを開けようとしたが開かない。荷物が沢山あり強引に押し込んでロックした時に、ロック番号が狂って仕舞ったかららしい。ホテルのボ



ーイさんに頼んで、ドライバーでこじ開けてもらう。

ホテルを9時過ぎにチェック・アウトしてマーケットに行く。ミッチーナーの商店街は州都としては見るべきものはないが、マーケットはそれに相応しいものであった。ヤンゴンのボージョー・マーケットと違い、土産物品はほとんど売っていない。地元の人が着る衣料品が充実している。ミッチーナーはミャンマーの最北部の州都で、寒さ対策用の衣料品が沢山売られていた。マーケットでは、トランクス2500k、肌着1500k、ラペットー500k、梨800kを購入した。

次に浅野君がYMCAに行きたいと言うので、同所を訪問することにする。彼は昔同YMCAに宿泊したことがあると言う。大西さんと呼んでもらうと、しばらくしてやって来た。昨夜はくだんの女性から話は聞いていなかったらしい。大西秀幸さんはミャンマー語に堪能で、将来はジンボー語研究で学位を取る予定だと言っていた。YMCAには熊本YMCAの桐原奈緒子さんらもやって来ていた。YMCAは世界の各地とネット・ワークがあり、友好協会と違い資金の潤沢さが羨ましい限りである。

2. バモー

ミッチーナー発は11時30分で、バモーには5時30分に着いた。ミ





ミッチーナからムセに通じる道は、インドのレドからの道路の延長線にあり、援蒋ルートの一つとしてレド公路と戦時中は呼ばれていた。前回は朝早くミッチーナを発ち、夕刻にバモーに到着したのであった。

道路は石が敷き詰められており、車はガタガタするが快調に進む。このことが、バモー-ムセ間では予想以上の悪展開となるとは予想できなかった。前回は雨季の8月で、道路はぬかるみ、平坦地では道路が水没し道なき道を通ったことが何度もあった。

途中ワインモー郡のナンサンヤンチェ村で昼食を摂る。二人分で7500k、中国製のビールは1000kであった。村の住民は中国系の人が多く、店内にはご令嬢の大学卒業写真が飾ってある。

途中オートバイと何度も出合った。前回の道中では、見られなかったことである。前回は各組織の衛兵が要所要所でゲートを持ち、チェックしては通行税を徴収し資金を確保していた。今回は中国に至る分岐点一か所でチェックを



受けただけであった。

ミャンマーも平和な国になったなあと思っていたのだが、日本に帰国してから3か月も経たないうちに、カチン独立機構(KIO)と国軍との衝突があった。中国の狼藉的な振る舞いに腹を立て、騒動を起こしたのが始まりであった。然しその後、終止が付かないほど衝突が続き、ミャンマー政府軍といがみ合う関係になってしまった。

バモーに近づくと敷石はなくなっており、アスファルトの簡易舗装が荒れたままになっていた。郊外には、近代的な建物のバモー工科大学が見られた。



バモーの宿泊先はフレンドシップ・ホテルである。2007年に増改築されており、前回泊まった時と比べると大幅に充実した設備になっていた。前回はバスタブがなくシャワーのみでお湯も出なかったが、今回は内装もきれいになっており、ヤンゴンやマンダレーのホテルと比べても遜色のないレベルに達していた。朝食も何品かが自由に選べるようになっており、前回のトースト、目玉焼き、コーヒーだけとは大違いである。娘がヤンゴンで修行したとのこと。

2008年8月から10月にかけてヤンゴンの商工会議所内のMyanmar Industries Association(MIA)で日本語を教

えていた時、バモーの女性教師がおり、トレーダース・ホテル(現スーレー・シャングリア)の様な高層ビルがバモーには一杯建っていると言っていた。しかし、高層ビルは1棟もなかった。けれども、ヤンゴンの繁華街で見られるような5階建て程度の建物は何棟も見られた。バモーは中国の国境に近く、ミッチーナと比べると街はよく発展して来ており、中国との交易の一端が見られた。

バモーは激戦地としても知られ、日本兵が造った朽ちたトーチカが残っている。街を散策後、ホテルから歩いて行ける距離にある中国料理店に行った。二人分で9200kであった。ビールは800kであった。

翌22日(火)、ホテルを9時に発ちマーケットに行く。マーケットはホテルから歩いて3分程度の所であり、勝手知ったる感じである。品揃えが見違える程に豊富になっていた。前回、朝屋台で食事した時、秘密警察らしき人とたまたま一緒になってしまった。ずっと尾行しているらしい。彼らは我々が反政府派組織と接触するのを監視するのと、身の安全を守る任務があるとのことだった。日本人が辺境の地で行くえ不明になってしまえば、国際問題にもなりかねない。さすがに、今回はそのような人はいって来ていなかった。

(つづく)



ミャンマー事情

知っていますか！パゴダは寺院ではない① —パゴダと寺院の違い—

都築 治



日本国内で刊行されているミャンマーに関する書物や新聞、テレビ等では、ヤンゴンにあるシュエダゴン・パゴダやスレー・パゴダをほとんどが寺院として表現している。「シュエダゴン・パゴダは、ヤンゴンで一番大きい寺院である」と記している著名人もいる。パゴダ=寺院である。著名な大メディアでさえも例外ではない。

これらは、ミャンマーにおけるパゴダ(仏塔)と寺院の意義を、全く理解していないことから、もしくは勉強不足から来たものと考えられる。

ミャンマーではパゴダ(仏塔)と寺院(寺・僧院)は全く別の範疇のものであり、パゴダは決して寺院ではない。ミャンマー人の宗教観や生活を理解する上で、この点を心して欲しいものである。

パゴダは、一般の信者の寄進によって成り立っており、その管理、運営は在家の信者が行っている。僧侶が宗教的な行事をパ



ゴダ内で主催することはなく、その境内に僧侶は住まない。パゴダは、一般信者の礼拝の対象であり、境内で催す仏塔祭などは在家の信者が主催する。

これに対してお寺(寺院、僧院)は、同じように一般の信者の寄進によって財政をまかなっているが、運営は僧侶が行っている。そこに居住し宗教的行事を行い、修行活動をしている。寺は出家の修行生活の場である。パゴダと寺院は宗教的な施設という意外、全く別なものである。

パゴダはミャンマー語ではパヤー(PAYA)と言い、仏塔自体はゼディ(ZEDI)と呼んでいる。パゴダは、端的に言えばお釈迦様の化身と考へても良く、仏像、仏塔、聖遺物などを総称しパヤーとして崇める。それ故、シュエダゴン・パヤーは仏塔自体がお釈迦様の化身と考へられているから、仏塔そのものを礼拝の対象とする。マンダレーのマナムニ・パヤーでは塔に対してではなく、中に安置されているマナムニの像を礼拝の対象とする。

同じくヤンゴンのチャウッタジー・パヤーでは、横臥した釈迦像をパゴダ(パヤー)と呼んで礼拝する。古都バガンの有名なアーナンダ・パトーや、ダマヤンジー・パトーなどは塔にではなく、中に安置してある過去仏の四体の像を拜む。これに対して、シェズイーゴーン・パヤーは塔そのものがお釈迦さまの化身であるから、塔を礼拝の対象とする。(つづく)





特別寄稿

緬国(ミャンマー)滞在奮戦記 連載① 知られざる誇り高き騰越守備隊

国土交通省ミャンマー鉄道改善WG委員会(委員)
(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)
高松 重信

日本人として 最近の世界情勢を眺望すれば、我が国及び世界は先の大戦を反省したのにも拘わらず、ポピュリズム(populism)及び覇権主義(Rgional hegemony)などが、再び跋扈(ばっこ)しつつある兆候が見られる。他方、国内政治に目を転じれば、諸政策をめぐって与野党混迷状態。外からは北朝鮮によるミサイル発射問題などが報道を賑わしている。

このような環境下で、我々は何を拠り所にして集団社会生活を営んでいるのであろうか。我々日本人が祖先から継承しているIdentityは一体如何なるものであろうか。結論的に言えば、それは司馬遼太郎さんが自著で論じられている日本人の倫理観(精神)、即ち「公に奉ずる」であろうと判断させて頂いている。

私はこの観点で、今回、騰越守備隊の実話を記述させて頂いた。思いを読み取っていただければ幸いである。



台北地下鉄の電車MRT

1. はじめに

1-1 日本人の文化・倫理と技術

私は、我が国企業が受注した台湾地下鉄電車の現地生産(ICP)に関わる業務で2008年から5年5ヶ月間、台湾に駐在した。この中で他国の製品とそれぞれの国々の人達と交わった。その結果、製品品質に対する次の認識を得るところになった。

我が国は何故「良い製品」を提供できるのであろうか。

勿論、今まで培われてきた技術の集積、システム及び設備の高度化、日本人特有の応用力などもその要因になっているでしょう。しかし、結論的に申し上げれば、製品品質は、各国が如何なる文化を有しているかに少なからず影響を受けている。

我が国製品の良さは、日本文化を裏付けている『我が国人々の倫理観(精神)』に少なからず起因していると悟るに至った。

1-2 日本人の倫理観(精神)と騰越の守備隊

司馬遼太郎さんは日本人の倫理観(精神)を自書で次のように論じられている。平安時代、公家による律令政治による重税のために百姓などは高知の檮原地区などの人里離れたところに逃避し土地を開墾し生活を営んだ。これらの人々の間で武士少数団が各個に存立していった。これが武士時代の幕開けとなり、それらの武士から「名こそ惜しかれ」の倫理観(精神)が醸成され、時代とともに、此れが「公に奉ずる」に発展していった。

そして時代が変遷し日本の近代史の幕開けとなった。我が国の幕末から明治時代は世界史の中でも例をみないほど特異に発展し、これがアジアで唯一の独立国を堅持したと言って差支えがない。また、戦後の驚異的な復興、阪

神淡路震災および東日本大震災時のあの混乱した状況であっても、節度ある行動が見られた。

この原因が我々日本人の精神である「名こそ惜しかれ」「公に奉ずる」に起因していると述べておられていた。

第二次大戦で、我が国がアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならぬ。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に命じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、これらの倫理観(精神)を持つ日本人が、明治以来、独立自尊を堅持し、幾多の苦難や困難な課題を克服し、現在の平和で豊かな我が国を築き、平和と共存の旗を掲げ国際貢献をも積極的に実施しているのも、また事実である。

私は、このことを我が国の誇りに思う。それは単に我が民族を自惚れる思い上がりの形容でもない。また、徒にポピュリズム(populism)又は民族主義

(ethnicism)を鼓舞することでもない。この資源の乏しい国、百年遅れてスタートした小さい国が、よくかかる国家を造り上げたものだと思う。その限りに於いて、これを日本人の誇りと称しても、世界は笑わないであろうと思う。

一般的に言って、先の大戦に於けるビルマ戦線に対する我が軍の戦略の拙さが、1943年後半頃から顕著になった対敵戦力の低下と相俟って苦戦を重ね、ついには惨憺たる戦いになっていった。

例えば、インパール作戦及びトンギー遭遇戦など自然の摂理を無視した作戦も少なからずみられた。このためにビルマへ進軍した旧日本軍将兵30万人が熾烈な苦戦の中で勇戦されたが、その内2/3約18万人が痛ましい最期を遂げられ、その多くの将兵が未だ日本に帰還せず彼の地に眠っておられる。誠に慚愧の念に堪えない次第である。

この様な悲惨な戦いの中にあっても、我が国の安寧を護るために、ビルマ北辺の地、国境付近、中国雲南州の騰越(とうえつ)の地で、「騰越守備隊」の日本将兵は身の犠牲を顧みず祖国のために最後まで隊長以下一糸乱れず、勇敢にして誇り高く戦い通し、敵軍に大打撃を与えた。これら我

が国の将兵方々の奥底には祖先から受け継いだ日本人の「公に奉ずる」と言う倫理観(精神)が存在し、それが騰越守備隊 戦士方々の原動の源になったと考えられる。

この騰越守備隊の戦いは後述する古代ギリシャ形成の起因となったスパルタ戦士を中心としたギリシャ軍とアケメネス朝ペルシャ遠征軍が戦った彼の有名な「テルモピュライの戦い」に匹敵するか、乃至 それ以上であったと言っても過言ではない。

また、この守備隊には、「元巨人軍の名捕手であった吉原正善伍長」が配属されており、大いなる活躍したが、残念ながら、ついに彼もこの攻防戦で戦死されています。

我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。この観点で、今もって人知れず、彼の地で眠り我が国の安寧と発展を

期待している「騰越守備隊」の実話を記述致させて頂いた次第である。

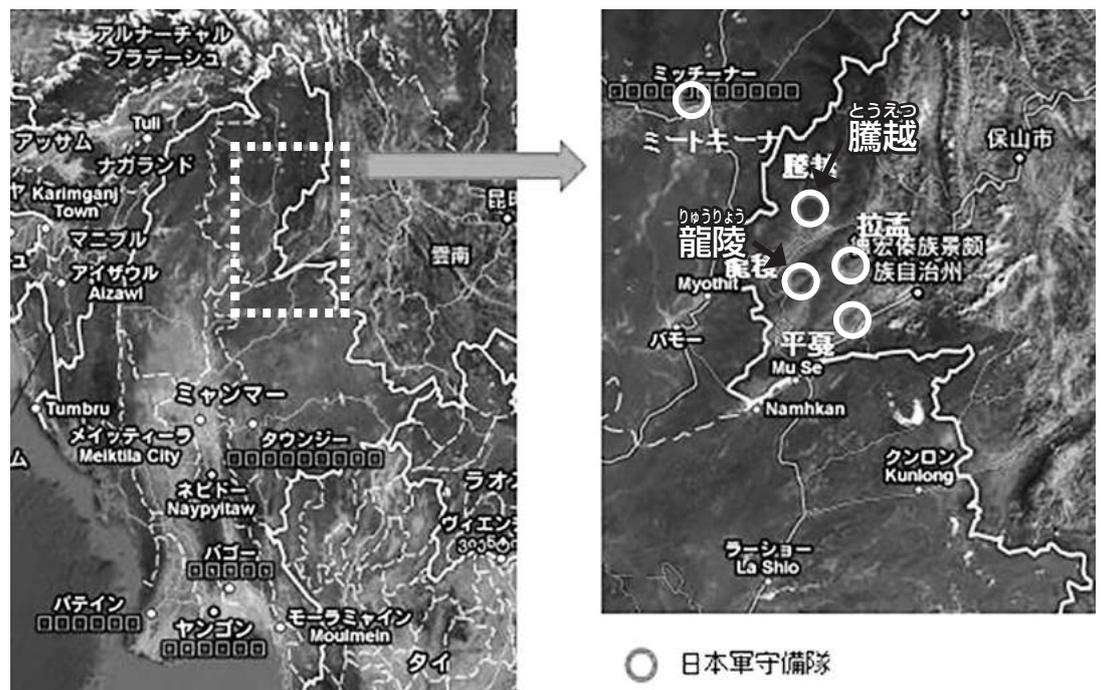
2. 騰越陣地の地理的要衝

先の大戦中、我が国がビルマ(現ミャンマー)に進駐した目的は次の三つであった。

- (1)我が国は当時、中国と戦火を交えており、大戦以前から米英などはビルマ・ラングーン(現ヤンゴン)からマンダレーを通り、昆明を經由して国民党軍(蒋介石)の重慶へ物資を搬送していた。この援蒋ルート遮断のためにビルマへ進軍した。
- (2)ビルマを英国の植民地から解放し、大東亜共栄圏確立を確立させ、我が国とアジア諸国の共生を図り、我が国将来の存立をより確かにする。

★大東亜共栄圏: Greater East Asia Co-prosperity Sphere= 植民地を解放し、共存共栄の国際秩序建設。

- (3)当時の我国の絶対防衛圏の





西端をビルマにおく。

騰越は、中国雲南省怒江(どこう)以西地区、随一の大都市で騰越平野の凡そ中央に位置し、人口約4万、学校及び諸政庁の所在地であった。周囲に城壁をめぐらした城郭都市であり、政戦略上の要所であり、1630年に、政緬軍の将軍が築いたと言われている。街は城壁に囲まれ、周囲は約4キロの正方形に近く、高さ5メートル、幅2メートルで外側は石、内側は積土によって構築されており、自然の要害となっていた。

市街の周囲には、3キロほどの平地を隔てて、独立した高地があった。北方には高良山、北東2キロに飛鳳山、南方2キロに標高200メートルの来鳳山、西方4キロには宝鳳山がある。これらの高地からは、騰越はまる見えであり、騰越防衛のためには、周囲の高地をも防衛しなければならなかった。これらを防衛するためには、最低三個連隊(7500人)程度が必要であったが、実際に防衛の任に就いたのは約2300人であった。また、この地はインド、ビルマ(現ミャンマー)、中国を結ぶ交通の要地でもあった。一方、直接、龍陵(中国)に通ずる地形は風光明媚であり、気候は日本の九州に近い時期もあったが、冬は冷涼で降雪を見ることもあった。住民の大部分は漢民族で、一部タイ人、シャン人が混在していた。

3. 騰越守備隊

3-1 1942年(昭17)末のビルマ国境雲南の戦局

1942年(昭和17年)末に怒江反撃作戦を終えた『龍(たつ)兵



山岳で警戒中の日本兵

団=久留米56師団の秘匿名』は雲南の怒江以西に布陣し、日夜警戒していた。このころ、連合国軍は雲南総反攻準備を着々と進めていた。その計画は米国空軍を援護にあたらせ、砲兵数個大隊を作戰に参加させ、遠征軍(中国軍主体=国民党軍)十万の補給は、全て米国軍が負担する。蒋介石軍の衛立煌將軍を總司令官とし、米軍スチルウエル中將を參謀長とした。その兵力は昆明にある予備軍を合せる約30万という途方もない大兵力であった。

これに対峙する日本軍の『龍兵団』の兵力は約1/3を「菊兵団=第18師団(久留米)」への増援に転出したので、実質は一万一千人であった。しかし、中小隊長及び兵はいずれも歴戦者ぞろいであり、統率する松山師団長及び川道參謀長は、当時、我が国、国軍の逸材と目された人物であった。

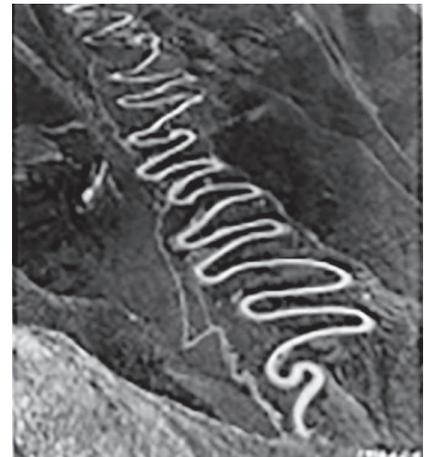
「龍」の防衛地域は、北はピポー付近から南はクンロンに至る約400キロ(JR名古屋駅からJR東京駅まで366km)の広大な正面であった。400キロを一万の兵力で守備する戦術としては、敵の進出路を押させ妨害しこの間に主力

持って、内線に誘い込み、各個撃破するほかない。

この戦法を有利に展開するためには、敵情を得るのが先決であった。幸運にも1944年(昭19年)2月末、中国軍の連絡機が濃霧のために誤って騰越付近に不時着した。この機に中国軍の情報少佐が乗っており、彼が持っていた暗号書、雲南軍の配置や編成表を入手することができた。

一方、芒市にあった我が軍の諜報機関の敵通信傍受などの大いなる活躍もあって、『龍兵団』が縦横無尽な活躍ができたのも、これら情報の把握によるところも大きかった。

1944年(昭和19年)5月11日、雲南遠征軍(中国の国民党 蒋介石軍)が反攻に転じてきたが、『龍』は5月5日に既にその反攻計画を知る所になり、川道參謀長は師団の各長を芒市に集合させ、師団の戦略方針を図上演習(兵棋演習)し終えた。そして敵の最終的な目的がレド公路の再開であると各長に伝えた。つまり、決戦場は拉孟、龍陵、芒市、騰越方面になることが判明したので、我が軍の兵力力点が明らかになった。



レド公路の一部



※レド公路：インド～ビルマ北辺を通り雲南から当時、蒋介石軍の首都と言っても過言ではない重慶まで、援助物資を輸送するルートをレド公路と称した。

遠征軍の戦術は怒江に沿って広く布陣している「龍」の両翼を撃破する。主力軍が怒江を渡河をし、中央から奥深く侵入する。そして両翼から「龍」を包囲する。包囲が整った時点で、主力が正面攻撃をかけ、一挙に「龍」を撃滅するという誠に壮大な作戦であった。

保山に雲南軍を進めた衛立煌將軍は、相手がたかが1/3が欠けた一個師団である。7万人の大軍を持ってすれば一週間で撃破できると大言壮語していたようだ。

しかし、このおり、我が軍の平憂(へいゆう)など各地区に於ける見事な戦いは機会があれば他日記述したいと考えているが、我が「龍」のこれら戦いにより遠征軍の第一次攻撃は大きな犠牲を払い失敗を喫した。

米軍のウォルター・ウッド偵察少佐は大塘子での戦いで、148連隊(久留米)の第三大隊を指揮した宮原少佐の反撃戦闘を口をきわめて称賛している。

3-2 騰越守備隊

騰越は、1942年(昭和17年)5月10日、第56師団(久留米)が占領した。この地は戦略上重要であるから、歩兵第148連隊(久留米)がこの地を確保し、歩兵団長水上少将が守備隊長に任命されていたが、少将がミートキーナー

(現ミッチーナ)救援のために転出したので、148連隊長であった蔵重康美大佐が守備隊長を命じられた。

当初は敵の蠢動も殆どなく、この美しい騰越は平和であった。遠い昔、マルコ・ポーロがアジアの交易の拠点として、壮大なロマンを夢見たという騰越の街は、いたってのどかであった。

しかし、1944年(昭和19年)5月11日、雲南遠征軍の第一次攻撃に対して、『龍』の師団として騰越守備隊もこの戦いに参加し、敵軍を撃破した。

第一次攻撃に失敗を喫した雲南軍は同年6月10日第二次攻撃を開始した。攻撃目標の一つに騰越も定められた。そこで

守備隊長であった蔵重大佐は6月22日に次の守備体制を布いた。



148連隊長 蔵重大佐

●飛鳳山陣地は第3大隊(宮原春樹少佐)、第3大隊主力、速射砲中隊(1門)、野砲1中隊。

- 来鳳山陣地は連隊砲中隊(成合盛大尉)、速射砲中隊(1門)、歩兵第6中隊、第2機関銃中隊の1
- 宝鳳山陣地は歩兵1個小隊(岡崎均少尉)、混成歩兵1個小隊、機関銃1個分隊、迫撃砲1門
- 高良山陣地は歩兵第9中隊の一部(副島秋義准尉)、歩兵第9中隊の1個小隊、第2機関銃中隊の1個分隊
- 城壁、東宮台陣地は歩兵1個大隊(早瀬千歳大尉)、混成歩兵3個小隊、連隊砲2個小隊(2門)、速射砲2個小隊(2門)、機関銃2挺
- 予備隊として第2大隊(日隅太郎大尉)、歩兵第5中隊基幹

このころ『龍=56師団』は龍陵守備隊の解困に成功し、次なる作戦のために戦力を集中するために騰越守備隊に骨幹戦力である宮崎少佐の大隊(第三大隊)を抽出するように命じてきた。蔵重大佐は騰越防衛に困難を来すが、師団命令を受け入れた。宮原大隊は6月27日騰越を出立していった。

蔵重大佐は、宮原大隊の転出に伴い、同大隊が占領していた飛鳳山を放棄した。同高地の戦略的重要性からみて、騰越防衛のためには大きな痛手であったが、結局、現有勢力で陣地変更を行った。(つづく)

〈参考文献〉

この国のかたち
帝国陸軍の最後
菊と龍
回想ビルマ作戦

文芸春秋 司馬遼太郎
文芸春秋社 伊藤正徳
光人社 相良俊輔
光人社 野村省巳



新刊書紹介

待望の初めての日本語訳完本! 「ダンマ・ニーティ (さとりにへの導き)」

池田 正隆 著

2017年(平成29年)4月14日

中 外 図 書 室

第3種郵便物認可

(6)



中外図書室



著者登場

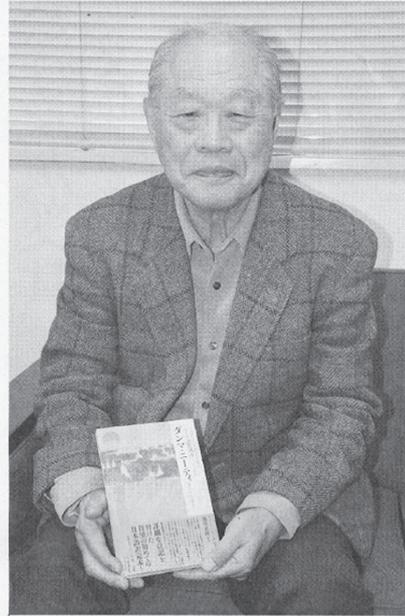
パーリ語教訓詩

ダンマ・ニーティ (さとりにへの導き)



日本ミャンマー
友好協会相談役

池田 正隆さん(83)



『ダンマ・ニーティ』とミャンマーの人々の宗教的な関わりを語る池田さん

上座部仏教が盛んなミャンマーには、「ニーティ」と呼ばれる教訓詩が多数伝わる。数あるニーティ詩集の中でもミャンマー最古といわれ、仏教の教えを説く『ダンマ・ニーティ』はミャンマーの人々の宗教的生活の指針として尊ばれている。このほど『ダンマ・ニーティ』に収められる414偈が、原始仏教研究者により日本語訳された。初の邦訳として注目を集めている。(高橋知行)

——『ダンマ・ニーティ』の概要は、

池田 編纂者・成立時期は、はっきりとは確定していません。もともとインドにサンスクリット語のニーティ書という様式があった、それに倣ってミャンマーでも、主に南伝上座部仏

ミャンマー伝承の詩偈

教の聖典に用いられるパーリ語で詠まれるようになつたと考えられます。

「ダンマ」は幅広い意味を持ちますが、サンスクリット語のタルマに相当する言葉で、「さとりに」と訳されることもあり、『ダンマ・ニーティ』を「さとりにへの導き」としました。ミャンマーでは最多の詩偈を収め、最も権威あるものとされます。僧院では経典と共に宗教的生活の中心的役割を果たし、人々への教育を担ってきたとされます。

——日本語訳の作業はどのようなものでしたか。

池田 愛知県のお寺で年に1回、夏にパーリ語の学習会を開いています。36回続いている、そのうち7回は『ダンマ・ニーティ』を教材としました。ビルマ文

字によるパーリ語原文を入手して、校訂を重ねました。本書はその成果を基にしたものです。出版に当たっては、内容を理解しやすくするため詳細な註記を付けました。

——どのような思いで上梓されましたか。

池田 『ダンマ・ニーティ』は長老僧らにより、子どもたちに至るまでさかんに説かれていました。幼い頃から仏教に触れて、戒を授かっていた僧侶となり、あるいは在家の立場でサンガ(僧伽・仏教僧団)を支える人となつたりして、ミャンマー仏教に貢献する人を育てています。

私は大学卒業後3年間ミャンマーに留学し、比丘僧として僧院生活を送りました。ミャンマーの人々は、食事供養などによりサンガを支えようとする意識が強いと感じます。

「功德を積めば再度人間に生まれ変わり、さとりに達することができるともいえない。従って、サンガを支えることは自分たちの救いにつながる」と信じられています。

本書を通じて、ミャンマーの人々を仏教に引き寄せる詩偈の数々を味わっていただければと思います。

◇ 本体価格1700円、方丈堂出版(電話075・572・7508)刊。

著者は当会相談役で元会長代行の池田正隆先生。

仏教の開祖ブッダ(釈尊)が、かつて布教した東インドのマガダ地方を故地とする民衆語とされるパーリ(聖典)語による「教訓詩」のことを「ニーティ」という。すなわち、仏法の目的である「さとりに・涅槃」へ導くための教訓詩集を「ダンマ・ニーティ」といった。

本書の掲載本は、パーリ語「ニーティ詩書」のなかで四一四偈(詩)の最多偈数で、それらは序偈以外に合計二四章に大別構成された、ミャンマー(旧ビルマ)国内で現存する最も権威あるものとされる。

詳細な註記を付けた待望の初めての日本語訳完本!

「BOOK」データベースより





本部だより

より楽しく充実したイベントに！ 次回のミャンマー祭りについて



毎年、東京の芝増上寺で行われる「ミャンマー祭り」。第三回目となる2015年から、(一社)日本ミャンマー友好協会としては初めて参加して以来、ミャンマー映画の上映イベントを主に企画して来た。昨年には映画上映だけではなく

ブースも出店、会員による当協会のPR活動を行い、有意義な出店となった。

映画上映に関しては、当初からミャンマー映画祭実行委員会の協力が不可欠で、日本では見られない貴重な作品を紹介することが出来た。

2015年「につぼんむすめ」(1935年作品)、2016年「あの世に1.4キログラム」(2009年作品)に引き続き次回も、ミャンマーを理解してもらう良質なミャンマー映画の上

映を催したいと協会役員及び理事一同望むものである。

次回も参加する予定だが、日程のプログラムが決まり次第ブースは去年以上に広いスペースを取る予定である。会員はじめ協賛して頂いた方々のご尽力とご協力もあり、今まで行ってきた実績から、より充実した内容で提供できると思われる。また、ホームページや会報等のツールも有効に活用され、訪れる人へのPR効果と新しい会員の募集も期待したい。

一般社団法人
日本ミャンマー友好協会
理事 伊藤 秀以智

支部だより

三重支部

昨年9月の三重県支部発足にあたりミャンマー大使から祝い状をいただいております。

当協会のこれまでの活動をご評価いただき、大使館挙げて今後のご支援を表明いただいております。大変有難いことです。遅くなりましたがお知らせいたします。

(編集子)



EMBASSY OF THE REPUBLIC OF THE UNION OF MYANMAR
4-8-26, Kita-Shinagawa, Shinagawa-ku, Tokyo, 140-0001
Phone: 81-3-3441-9291, Fax: 81-3-3447-7394

一般社団法人日本ミャンマー友好協会三重県支部 御中

ようやくしのぎやすい季節となりましたが、日本ミャンマー友好協会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび日本ミャンマー友好協会様の三重県支部ご開設にあたり、駐日ミャンマー連邦共和国大使館よりお祝い申し上げます。

日本ミャンマー友好協会様が46年以上の長きに亘り、ミャンマーと日本の間の友好関係の発展のために実直に力を注いでこられ、社会的な相互協力においても思いやりの心に満ち溢れながらおこなってくださっていることを常日頃より感謝しております。

日本ミャンマー友好協会三重県支部におかれましても、三重県周辺の地域に暮らすミャンマー人と親しく協力し合いながら、国民同士の友好関係を通して二国間の友好関係が今以上に発展していくことを望んでおります。またミャンマーに関する事柄などについて、三重県周辺の地域の日本の皆様さらに理解を深められ、二国の協力関係がいつそう向上してくるであろうと期待しております。ミャンマーについての活動を行われるときには、駐日ミャンマー連邦共和国大使館として、全力を挙げて協力させていただくためにドアを開いているということをお知りおきいただきたいと思います。

日本ミャンマー友好協会様の三重県支部のこれからのいつそうの発展を心よりお祈り申し上げます。

2016年9月30日

トウレイン・タン・ジン
駐日ミャンマー連邦共和国大使





佐賀だより

支部設立の動きもある佐賀ですが、西日本新聞に当協会の関連記事が掲載されました。同趣旨の記事が毎日新聞、朝日新聞、佐賀新聞にも掲載されました。

ミャンマーから介護人材 西九州短大、県老健協会、 友好協会が協定 [佐賀県]

西九州短大と県介護老人保健施設協会、日本ミャンマー友好協会ミャンマー支部の3者は11日、介護福祉士の人材育成協定を結んだ。事前に一定の語学力を習得した留学生を同短大の専門課程で教育する。学生には渡航費や学費の減免に加え、県内の高齢者施設でアルバイトできるメリットがある。学生の経済的負担を減らして資格の取得を支え、施設側も優秀な人材を確保しようという試みで全国でも珍しいという。

同短大は来年度に約20人の留学生を受け入れたいとしている。

昨年11月の入管難民法改正で、外国人でも介護福祉士の資

格を取れば日本の在留資格を得られるようになり、介護福祉士養成校では留学生が急増。一方、厚生労働省は2025年度には全国で37万7千人の介護人材が不足すると試算し、人手不足は県内でも厳しくなっている。

協定に基づき、西九州短大は7月にもミャンマーで留学生の入学試験をし、合格者は来年4月の入学まで、現地の「ヤマト日本語学校」で日本語や介護の基礎知識を学ぶ。その上で5段階ある日本語能力試験で上から3番目の「N3」（日常会話の理解）などを取得すれば、正式に入学を認める。

留学生は同短大地域生活支援学科福祉生活支援コースに2年間在籍。協会が手配した県内の高齢者福祉施設でアルバイトし、就労先に下宿する。授業料は県社会福祉協議会の奨学制度を利用でき、卒業後に介護福祉士として県内の施設で5年間働けば返済を全額免除する。

同短大の介護福祉士養成課

程の在學生は近年、日本人を含めて目標数40人の半数ほどしかなく、短大側としては学生市場の開拓にもつなげたい考えだ。

協定式が同短大で11日にあり、福元裕二学長は「県内の介護施設の求人に応えられない状況が続いていたが、立派な人材を養成していきたい」と述べた。

ヤマト日本語学校のドゥーゾーテツ・アキラ最高経営責任者（CEO）は「学生も生活不安が解消されるので勉強や仕事に励みやすい」と歓迎。県介護老人保健施設協会の藤岡康彦会長は「仏教国ミャンマーの国民は慈悲深く、介護に最適な資質を持っている」と語った。

2017/05/12付西日本新聞朝刊



協定を結んだ（左から）西九州短大の福元学長と日本語学校のドゥーゾーテツCEO、県介護老人保健施設協会の藤岡会長

表紙に寄せて



教がおおらかに共存しています。

明け方から数珠をもって参詣にきている人、仕事の前にやってきて瞑想にふける人、供花を持った若い女性、そして外国からの観光客、ここは終日人波の途切れることがありません。輪廻を信じているミャンマーの善男善女が、今日もより良い来世を願って祈りを捧げています。

<編集子>



ミャンマー支部

介護事情の視察を兼ねて
ヤンゴンの老人ホームを
訪問しました

平成29年3月4日(土) バハン町区(Bahan Township)にあるHninzigon養老院を訪問し、寄進をさせていただきました。同院はヤンゴン中心部の北にあり、近くにはシンガポール大使館をはじめ、多くのホテルや商業ビルが立地しています。寝釈迦像で有名なチャウッタジーパヤーも比較的近いところにあります。この老人ホームは予想したより大きな施設で、比較的裕福な人たち向けのように思われました。まだまだ高齢化社会ではないミャンマーですが、日本の介護事情にかんがみ参考になりました。



写真は左からウンスウェ事務局長、米村会長、平尾友里ミャンマー支部長、都築専務理事



Hninzigon養老院ホームに関する説明文 寄進した時の感謝文です

◎ミャンマー支部では、組織拡大に向けて一大イベント開催を考慮中です。これが実現すると、日本ミャンマー友好協会の認知度と

存在感が一気に高まります。

具体的には、日本から若いタレントを招聘して「日本祭り」を開催するものです。現在、費用や会場の選定を検討しています。

東京で開催している「ミャンマー祭り」の位置付けになるよう頑張っているところです。

関西支部

第21回市民国際交流のつどい
「わいわいフェスタ2016」
「ミャンマー研修生、日本舞踊で
涙の国際交流」

近江八幡市民と市内在住の外国籍住民らの交流会「わいわいフェスタ2016」が昨年11月27日(日)、同市市井町の「ヴォーリズ学園」で開催されました。

同交流会は今回で第21回目を迎えます。主催は(公財)近江八幡市国際協会と市内9団体でつくる実行委員会で、企画から実施までを毎年手作りで行われています。今年は心機一転、企画内容も大幅に刷新すると共に会場も歴史あるヴォーリズ学園のご協力を得る事が出来、雨天にも関わらず動員数は過去最高の500名超で、その内外国籍住民は過半数を数える大盛況でした。

圧倒的な人気を博したのが、ミャンマー人研修生7名による日本舞踊でした。日本女性を彷彿とさせる和服姿が印象的で、テレビや新聞社の取材もひっきりなしの人気ぶり。しかし、この人気の裏には人知れず涙の努力があったのです。この日の為に、日本語もおぼつか無く、日本文化にも触れた事のない彼女達は数か月前から近江八幡市内のコミュニティセン

ターで毎週土曜日夜6時から約1時間、正派・若柳流の若柳鶴竜先生から猛特訓を受け頑張り続けました。私もこのフェスタの実行委員の一人として、毎週彼女達を支援し、くじけそうになる彼女達を叱咤激励しながら、やっとこの日を迎えることができたのです。彼女達の達成感はもちろんのことながら、先生を始めこのチームに参加した関係者全員がお互いに固い握手を交わしながらその喜びに浸り、国際交流の素晴らしさを噛みしめました。

報告者：岡 晃市
滋賀県蒲生郡竜王町在住(当協会会員)
近江八幡ミャンマー倶楽部会長、(一社)日本ミャンマー友好協会会員、NPO法人アジア麻薬・貧困撲滅協会会員、(公財)近江八幡市国際協会賛助会員



会費納入のお願い

当協会も新体制のもと、順調に運営を始めています。会費未納の方は下記新規口座に納入をお願いいたします。

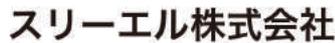
<年会費> 個人 10,000円
学生 3,000円
法人 50,000円

<振込先>
三菱東京UFJ銀行 新宿新都心支店 普通0376654 日本ミャンマー友好協会 都築治

会員増強をいたしております。お知り合いにミャンマーに興味のある方ございましたらご勧誘ください。



第4回“ミャンマー祭り2016”でのミャンマー映画の上映に際し、協賛して頂いた企業の皆様です。大変ありがとうございました。



編集後記

“ヤダナー”
ရတနာ
[yadana]

ミャンマーの“祈りの車両”

何やかやと国際情勢が緊迫続きで、どう見ても安らかな時代ではありません。国と国のせめぎあいは、己だけが何とか生き残ればよしと貪欲丸出しの世界になっているようです。テロ多発

のニュースを聞くにつけ、命を尊び他の存在に心を配るゆとりや優しさは人類に求めることはできないのでしょうか。そんな中“お正月の祈りの車両”という、一陣の薫風のような写真が届きました。

ミャンマーは4月がお正月です。炎熱の候でもあり、老若男女が手近にある容器やホースでお互い水をかけあう愉快的「水まつり」が行われます。

ミャンマー国鉄では工車車両に5人の僧侶に添乗してもらい、大きな拡声器でパーリ語による日常読誦經典(パリッタ)を唱えます。これは人々の平和、健康、安寧の祈りでもあるのです。車両の前と荷台に掲げているのはすべて「仏旗」で仏教の行事であることを表しています。これは青、黄、赤、白、橙の色鮮やかな旗で、130年前にスリランカで決まった世界共通の仏教の旗なのです。

この珍しい写真は、長年ミャンマー国鉄に技術指導をされてきた高松重信氏(当会副会長)の教え子、お弟子さんが撮影したものです。それにしても、工事車両でお経を拡



仏旗(1885年設定)



声しながら新年を寿ぐとはさすがミャンマー、仏教国ですね。

この世界共通の仏旗は、日本のお寺でも宗派をとわず大遠忌や法事の折に本堂や講堂の周りに掲げています。吹き流しになっていることもあります。機会がありましたら寺院で探してみてください。

当号で紹介いたしましたビルマ仏教研究の泰斗、池田正隆先生(当会相談役)の新刊書「ダンマ・ニーティ」は初の日本語訳です。その中でミャンマーに伝わる珠玉のような教訓の詩が1つ目につきました。

人は他人の欠点を

ゴマ粒ほどの大きさでも見つけるが

自身については

椰子の実ほどの欠点でさえ見えない

今号も何とか会報としてまとまりました。至らぬ己に自戒をしつつ、ご多忙の中原稿を寄せていただいた皆さまに感謝申し上げます。編集:松尾 義久